

就職氷河期に社会に出て、今も不安定な雇用に苦しむ。ロスジェネレーションと呼ばれる世代の単身・非正規の女性たちは、現在と将来に大きな不安を抱えています。アンケートでは当事者たちの声も多く寄せられました。この苦境は自己責任なのでしょうか。

①② 現在そして将来

頑張っても抜け出せない悪循環

兵庫県宝塚市職員
原わかささん

43歳。人生で初めて、正規雇用で働く。原わかささんは今年4月、兵庫県宝塚市に入社した。2019年、就職氷河期世代に限定して採用試験を実施し、全国的に注目を集めた同市。全国から計1816人が応募した。原さんは翌年、応募者478人の中から選ばれた3人のうちの一人だ。

1995年、高校1年の時に阪神・淡路大震災が起きる。教会の炊き出し活動にかかわり、将来の仕事として「ほんやりと「地域に仕えること」を描いた。奨学金を受け取りながら短大へ通い、バイトをかけもちした。卒業後は牧師の補佐と塾のバイトで生活費をかせいだ。結婚し、東海地方で子育てが始まったが、夫と別居することに。当時最低賃金は時給758円。時給約800円で、内職の高齢女性らが作る手袋を

軽自動車で回収した。野菜を分けてくれる女性に励まされた。2014年、地元に戻って非正規で学校事務などの仕事につく。収入は子育て世帯の平均に遠く及ばない。雇用期間は最長5年。暇さえあれば就職サイトをのぞいた。「子どもと夕食をともにして話す時間と体力を残したかったから、夜勤の仕事を手を出せなかった。仕事と子育ての両立はぜひいたくなくなのか」これまで「勤め先はどこ？」と聞かれるたび、正社員だと思われたいような答え方をしていた。終わりが

見えているのに、勤め先を名乗っていいのか戸惑いがあった。「精いっぱい働いてきたけど、自分がどこに所属しているのか分からず、漠然とした不安がつきまわっていた」。今夏、白紙の履歴書を捨てた。やもつ地できた安心感は、何にも代えられない。(中塚久美子)

ものまね芸人 すぎもとりょうこさん

電話オペレーター 兼ものまね芸人のすぎもとりょうこさん(38)が、就職活動をしたのは2005年。男女雇用機会均等法が成立して20年に

あたる。募集や採用にあたって「男子のみ」などどうたら直接的な差別は禁止されていたが、就活中、あることに気づいた。有名大学の男子学生らはどんどん就活が進む。関西の女子大に通うすぎもとさんは、1社も面接に呼ばれていない。女子大に求人を出す企業に絞って飲料販売会社に就職した。毎月、上から言われたケース数を売ることが「絶対」の仕事。空しくなり、心の負担になって退社した。次に、塗料の材料を扱う商社の社員になった2カ月後、リーマン・ショックに直面。社員が徐々に減った。部内ですぎもとさんだけ、分相が増えた。深夜まで職場で仕事をした。半年続けると、不眠とかゆみで

体調が悪化した。退職後、国立大の正規職員を目指し、まず大学事務のパートに就いた。5年雇用で週30時間、交通費なし。現実の生活が厳しかった。このままでいいのか。30歳で考えた。子どもの頃から得意だった「ものまね」芸人に挑戦しようとして東京へ。ショーパブでバイトし、タレント養成所で学んだ。今は、ものまねをたまにSNSで発信しながら、コールセンター大手に登録し、損保会社の仕事に就く。経済的に自信がなく、結婚や出産とは距離を置く。「労働力の価値を下げられ、キャリアをつめない悪循環から抜け出せない。私たちの能力の問題なんじゃないか」(中塚久美子)

2人に1人 年収200万円未満

首都圏の非正規単身女性 昨秋調査

年収はほぼ2人に1人が200万円未満で、貯蓄は10万円未満が最も多い。就職氷河期に社会に出た「ロスジェネ世代」に属する非正規単身女性に焦点を当てた最新調査で、そんな過酷な現実が明らかになった。

調査は2021年3月、横浜市の委託を受けて、公益財団法人横浜市男女共同参画推進協会がまとめた。当事者アンケートは20年10月に実施し、調査対象は、首都圏在住の34～49歳の働く単身女性計900人。うち非正規が141人で、正規が159人。収入や貯蓄における両者の大きな格差がはっきりと表れた。

非正規の年収は、200万円未満が44%と半数に近かったが、正規では同様の回答は3.1%に過ぎなかった。また、非正規の8割近くが、300万円未満と答えている。貯蓄額では、非正規は「10万円未満」が最多で、ほぼ3人に1人の30.5%。一方、正規で最も多かった貯蓄額は、「1500万円以上」で、

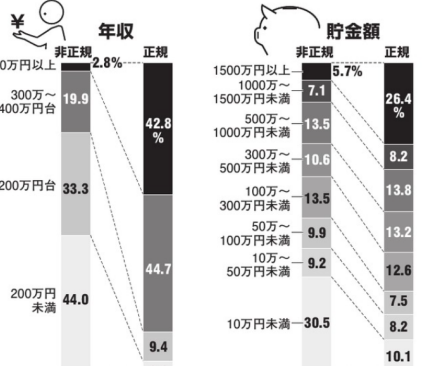
26.4%だった。仕事に関する悩みや不安を非正規のみに聞いたところ、「収入が少ない」が53.2%、「雇用継続の不安」が39%で、これがロスジェネ世代の非正規単身女性が抱える「2大困難」だといえる。

非正規で働く理由として、39%が「正社員として働ける仕事がないから」39%で、これがロスジェネ世代の非正規単身女性が抱える「2大困難」だといえる。協会では、担当者約20人が参加する正規雇用代行に向けた、キャリアカウンセリングなどのプログラムを開講している。担当する秋葉由美さん(48)は、「非正規として扱われてきた経験から、自分に自信がない人が多い」と話す。会社内で名前を覚えてもらえない、会社の情報が自分に共有されないなど、小さな経験の積み重ねが、自己肯定感をそぐのではないかという。「プログラムを通じ

首都圏在住ロスジェネ単身女性調査

※令和2(2020)年度横浜市就職氷河期世代非正規職シフト女性就業支援に向けた調査及び事業開発報告書から横浜市男女共同参画推進協会が20年10月に実施

対象 首都圏に住む34～49歳の働く単身女性。非正規141人と正規159人

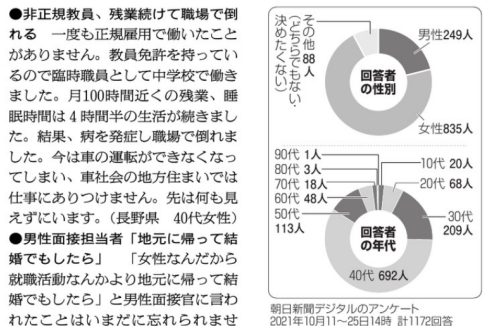


て、できないことばかりでなく、できることを目をつけ、自信をつけてもらっている」と話す。調査を担当した植野ルナさん(46)は、自身もロスジェネ世代で非正規職を経験してきた。「私たちが努力

しなかったわけではなく、生まれ年の不運でこうなった。女性が不利な立場に置かれる現在の雇用慣行や不公平な社会保障制度は変えていかなければいけない」と話している。(寺田実穂子)

先が見えない ■ なんらかの公助を

フォーラムアンケートに寄せられた回答の一部です。その他の回答も、<https://www.asahi.com/opinion/forum/144/>で読むことができます。



●非正規教員、残業続いで職場で倒れる 一度も正規雇用で働いたことがありません。教員免許を持っているので臨時職員として中学校で働きました。月100時間近くの残業、睡眠時間は4時間半の生活が続きました。結果、病を発症し職場で倒れました。今は車の運転ができなくなっています。車社会の地方住まいでは仕事にありつけません。先は何も見えずにいます。(長野県 40代女性)

●男性面接担当「地元で帰って結婚でもしたら」 「女性なんだから就職活動なんかより地元で帰って結婚でもしたら」と男性面接官に言われたことはいまだに忘れられません。男性でも大変だった氷河期の就職活動、女性が正規で就職するには大学卒業後に専門学校に通い、専門資格を手に入れるなどの遠回りが必要な時代でした。それにはお金が必要でした。そのすべらず持たなかった女性たちがいまも非正規となっているのです。なんらかの公助施策を考えてほしいものです。(千葉県 40代女性)

●ずっと自己責任だと思ってきた就職できず、結婚に逃げました。DVを受けて、離婚しました。幸い正社員の職はありますが、介護業界

「標準」である限り、女性は低収入の仕事に誘導される。特定の選択をしなければ困窮し、不安しか与えない仕組みはおかしい。どう改善するか。偶然にも今日は投票日。自分だけの判断で行動を起こせる。(中塚久美子)

フォーラムアンケート「あなたの読書について教えてください」を、<https://www.asahi.com/opinion/forum/>で募集します。

半数が老後に「生活保護」か

国際医療福祉大・稲垣誠一教授が予測

ロスジェネ世代を含む単身・非正規雇用の女性は、約半数が老後に貧困化するという予測があります。非正規で働く未婚・離別の女性には、なぜ落とし穴が待ち構えているのか。この研究をした国際医療福祉大学の稲垣誠一教授に聞きました。

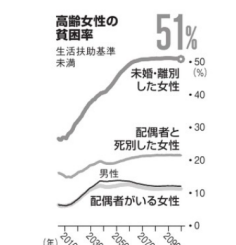
などの人生のイベントを、現実と同じ確率で一人一人、くじを引くように決め、のべ1千万人以上の人生をシミュレートした結果です。

この世代の女性が問題を抱えるのは、男性と比べて非正規雇用が圧倒的に多いからです。低賃金で年金保険料を払えず、貯蓄も少ない人は、老後に少額の国民年金を受けるか、無年金になります。非正規の単身者は男性でも経済的に困窮する恐れが高いのですが、正社員率が高いので女性ほど問題化しません。未婚、離別の単身女性が貧困化しやすい理由は、今の社会保障制度が、大多数が結婚し、生涯連れ添う

ことを前提で作られているからです。結婚が当たり前ではなくなった時代に制度が追いついていない。男女雇用機会均等法ができて30年以上経つというのに、男女の雇用格差が大きいのも大きな問題です。

しかし、ロスジェネ世代の女性の苦境は、現在は見えにくい。「家事手強い」として親と同居している女性が多いからです。親と死別した後には経済的に困窮します。問題なのは、40代、50代になっている女性たちを今から正規雇用化しても、将来の貧困化を防ぐ効果は小さいということです。将来の年金額は過去20～30年の保険料支払いが反映されるため、貯蓄や投資によって老後の準備をするのも簡単ではない。

今のままでは、最後のセーフティネットである生活保護を必要とす



る女性が激増し、制度として回らなくなるでしょう。就職氷河期に社会に出たタイミングや男女の雇用格差は、決して自己責任ではありません。現状に合っていない社会保障制度を改革する必要があります。(開き手・真鍋弘樹)

来週11月7日は「ロスジェネ 女性非正規②」を掲載します。